

「書道と私」

私は書道を十年以上続けています。習い始めは特に目標があったわけではありません。習い始める字を書くことが苦ではなかったことや、昇段することが嬉しかったからだと思っています。そして、このたまたま続いた習い事であった書道が、偶然にも現在の大学での学びに繋がりました。

ただの習い事であった書道に真剣に力を入れ始めたのは、高校の書道部に入ったときからです。一つでも多くの賞をとりたくて、放課後や休日にも何度も何度も同じ作品を繰り返し書き直しました。特に、部員全員で一致団結して一つの作品を作り上げた書道パフォーマンスは未だに忘れることができありません。しかし、高校二年生になった辺りから

自分の実力不足と展覧会やコンクールなどで自分の作品が評価されないことに心が折れ、卒業と同時に書道をやめようと思っていました。ところが、センター試験で大失敗をしてしまい苦慮の末、書道の道に進むことに決めたのです。

それでも浪人をしようかと悩むほど自分の選択に納得がいかず、一年ほど悶々とした思いを抱えていました。しかし、大学での学びを経て、今年二十歳を迎えた今は気持ちが一八十度変わりました。あんなにも高校時代に苦しかった書道がとても楽しいのです。

今でも展覧会やコンクールなどでは賞に至りませんし、特別評価をしてもらえないことにもありません。それでも、評価されることに拘らず、ただひたすらに書道について深く学び、書き続けるその行為が私自身にとってかけがえのないものとなりました。

例えば、書道専修全員で黙々と石に字を彫る篆刻をしたり、奈良で有名な墨づくりの現場を見学したことは、とても有意義で楽しい体験でした。また、漢字の画数や組み合わせを考慮した漢詩を探して、そこから自分の好きな書家の字を真似て作品を作り上げていく地道な作業は、毎回徹夜続きになりますが、レイアウトが完成したときは大きな達成感を得ることができます。今は期末の課題として出された「書譜」という作品の臨書、約六百枚を仕上げるのに追われています。確かに大変ではありますが、書くのをやめたいとは一度も思ったことはありません。

大学で書道を学ぶ中で、一つ気づいたことがあります。それは、教師という仕事が多様な思慮の上に成り立っているということですね。正直、私は大学生になるまで教師という存在があまり好きではありませんでした。

しかし、実際に模擬授業を行うなかで生徒にどんなことを学ばせたいか、どんな能力や知識を身につけさせたいかなどが考えられた上で一つの授業が成り立っていることを知り、学生時代に深く考えず授業を受けていたことを後悔しました。

私は将来、二十年間以上も学校や書道教室の先生、家族を含めた沢山の人々に支えられて得た学びを、教師となって次世代の子どもたちに還元していきたいと考えています。徳島県は他の県に比べて、書道の文化があまり盛んではありません。少しでも書道という文化に親しみを持ってもらい、子どもたちの人生を豊かにするためにも、楽しく、そして分かりやすく書道を教えていきたいです。